原著

若年母親の新生児に対する知覚と育児行動

玉城　清子[1)]　上田　礼子[1)]

要　約

【背景】全国的に高校生の性交経験率の上昇に伴い若年者の妊娠中絶率は上昇傾向にある。沖縄県の若者は他府県の若年者に比べ人工妊娠中絶より出産を選択する者が多く、若年母親からの出生割合が高い状態が持続し、母子保健上の課題となっている。Field らは、若年母親は育児への関心が低く、また、Braussard らは母親が子どもを negative に知覚すると子どもの心身発達に悪影響があると報告している。しかし、わが国では若年母親の新生児に対する知覚と育児行動に関する研究報告は少ない。

【目的】若年母親の新生児に対する知覚と育児行動との関連を明らかにする。

【研究方法】本研究は妊娠確定時20歳未満の妊産婦を対象とする縦断的研究の一部で、若年母親の新生児に対する知覚と育児行動に焦点を当てている。新生児に対する知覚は修正版 NPI を用い分娩後入院中と１か月後に調査を行った。また、産後１か月目には属性や育児用品の準備状況、育児行動についても質問紙を用いて調査した。

【結果】調査票の回収は、分娩後の入院期間中45人、産後１か月時点38人であった。修正版 NPI には分娩後と分娩１か月後の２回のデータが必要であるため、２回の調査票が揃っている30人を分析対象とした。平均年齢は対象者18.8歳(SD±0.94)、パートナー22.3歳(±4.43)であった。家族形態は核家族46.7%で、他は何らかの形で実家に同居していた。育児の大部分は若年母親が行っていた。若年母親の33%は自分の赤ちゃんを普通の赤ちゃんより低く、つまり negative に知覚していた。「授乳」「沐浴」「衣服の世話」の育児行動の実施率と母親の子どもに対する知覚との関係を検討した結果、自分の赤ちゃんを negative に知覚している者は「衣服の世話」の実施率が有意に低かった。

【結論】若年母親の育児の実施率は高く、先行研究の若年母親は育児への関心が低いとは一致しなかった。「授乳」や「沐浴」の実施率は修正版 NPI 得点の negative 群と positive 群間に有意差は認められなかった。しかし、「衣服の世話」に関しては自分の子どもを negative に知覚している母親の方が実施率は低かった。これは、排泄などによる衣服の汚れに関して赤ちゃんのサインへの反応の少なさを意味しているとも考えられる。

Key words：**若年母親、ハイリスク母親、新生児、育児用品の調達、育児行動、母親の新生児に対する知覚**

Ⅰ．緒言

社会の変化により思春期・青年期は延長傾向にあり心理社会的自立までに長時間を要するようになっている。一方身体的成熟は早まり、中学生・高校生の性交渉経験率は上昇し、高校３年生女子の39%は性交経験がある[3)]現状である。それに伴い20歳未満の若年者の人工妊娠中絶率は上昇傾向を示している[4)]。また、若年者の出産に着目すると、沖縄県は19歳以下の母親つまり若年母親から生まれる子どもの割合が全国平均の２倍[5)]となっている。一般に若年妊産婦は、精神的に未熟[6)]であるとともに、若年労働者のため経済的困窮をきたしやすく、親としての責任感が少ない、育児放棄や乳幼児虐待等[7)]が指摘されており、本県でも若年妊産婦は母子保健上の課題の１つとされている。

ヒトは人間社会において人によって養育されないと人間らしく育たないことは「狼に育てられた子」[8)]から明らかである。とりわけ母親は幼少期の育児の大部分を担っている現状なので、母子関係形成の責任の大部分は母親にあるとされ[9)]、母親の重要性が指摘されている[10)]。

一方子どもの側からみれば、母親との相互作用を通して心のきずなを結び、それが基本的信頼感確保の基礎になる[11)]ことから子どもにとって母親は重要な人物である。

母親は、ある程度自分自身の欲求を抑制し子どもに自分自身を捧げることによって母親らしさが芽生え母親役割遂行[12)]ができるとされる。しかし、Field ら[1)]は、若年母親は心理社会的に未熟で育児への関心が低いと報告している。我が国の若年母親の育児では、外間らが若年母親と成人母親の児の間に発育や罹病率、母乳栄養実施率に差はなかったと報告している[13)][14)]が、若年母親の乳児の育児に関する報告は少ない。Braussard と Hartner は母親の子どもに対する知覚が、その後の子どもの発達に影響することを明らかにしている[2)]。しかし、実際の育児行動との関連で調査された研究は少ないのが現状である。

本研究の目的は、若年母親の新生児に対する知覚と育児行動との関連について明らかにすることである。

Ⅱ．研究方法

１．対象および期間

本研究は妊娠末期から分娩後１年までの縦断的研究の

１）沖縄県立看護大学

一部である。研究対象は沖縄県中南部の７つの産科医療施設受診中の妊娠確定時20歳未満の者で、産後１か月に自分の子どもを養育している母親である。調査期間は平成14年12月から平成16年１月までであった。調査票が回収できたのは分娩後の入院期間中45名、産後１か月時点38名であった。母親の新生児に対する知覚の算出には分娩後と産後１ヶ月時点のデータが必要なため、両方の調査票が回収できた30名を分析対象とした。

２．調査内容と方法

１）調査内容

（１）属性：年齢、家族形態、年収、家庭経済状況

（２）育児行動：育児行動として授乳・衣服の世話・沐浴の３項目について、準備から後片付けまで一連の行動の実施率を質問した。

（３）修正版 Neonatal Perception Inventory （以下修正版 NPI と称す）：原版 NPI は子どもの発達過程に問題のありそうなケースを早期にみつけ、母親と子どもに必要な援助を行うために Braussard と Hartner[2] によってピッツバーグの５医療施設で、満期産・単体の初産婦を対象とした調査から考案された測定用具である。上田ら[15] は原版 NPI を日本人に適合するように修正版 NPI を作成している。本調査では修正版 NPI を用いた。修正版 NPI の質問紙は「普通の赤ちゃん用」と「あなたの赤ちゃん用」の２種類があり「普通の赤ちゃん用」は出産後に、また「あなたの赤ちゃん用」は産後１か月時点で測定するものである。赤ちゃんの「泣く」「哺乳」「吐く」「睡眠」「排便」「授乳や睡眠の習慣」の６項目の行動カテゴリーについて、母親がどの程度問題として知覚しているかを測定するものである。検査の方法は「普通の赤ちゃんの質問紙」では「普通の赤ちゃんはどのくらい泣くと思いますか？」というような６つの行動カテゴリーそれぞれに対して「非常に多く」から「なし」まで５段階尺度のなかから回答を求める。「非常に多く」に５点配点し漸次点数を減少させ「なし」に１点を与え、行動カテゴリーの得点を求め、さらに６つの行動カテゴリーすべての得点を加算し、特定の個人の「普通の赤ちゃんの知覚得点」を求める。得点の高さは母親が困難と知覚している程度示している。次に「あなたの赤ちゃんの質問紙」においても、「あなたの赤ちゃんはどのくらい泣きますか」というような６つの行動カテゴリーについて、普通の赤ちゃんと同様な方法で「あなたの赤ちゃんの知覚得点」を求める。最後に「普通の赤ちゃんの知覚得点」から「あなたの赤ちゃんの知覚得点」を減算したのが修正版 NPI 得点である。修正版 NPI 得点がマイナスもしくは０点の母親は自分の赤ちゃんを扱いにくいと知覚していることを示している。Cronbach α は「普通の赤ちゃん」0.779、「あなたの赤ちゃん」0.701で、内的整合性があることを示していた。

２）方法

「普通の赤ちゃんの質問紙」は分娩後の入院期間中に留め置き法で、また「あなたの赤ちゃん」の修正版 NPI 及び属性や育児行動については産後１か月目に郵送法で調査した。

３．倫理的配慮

口頭および文書で研究の主旨および拒否が可能なこと、不利益をこうむることのないことを説明後、同意の得られた者を対象とした。対象者が18歳未満の場合は保護者にも同様の説明を行い、保護者の同意も得られた者を対象とした。本研究を始めるにあたり沖縄県立看護大学倫理委員会の承認を得た。

４．統計解析

統計解析は SPSS J 13.0for Windows で t 検定、Wilcoxon の符号付順位検定を、また Halwin で χ^2検定を行った。有意水準は５％以下とした。

Ⅱ．結果

対象者の属性は表１に示すようであり平均年齢18.8歳（SD ±0.94）、パートナー22.3歳（SD ±4.43）であった。家族形態は核家族46.7%（14人）、夫婦で実家に同居40%（12人）、母子のみ実家に同居13.3%（４人）であり、５割強は実家に同居していた。家計を支える者を多重回答で求めたところ、核家族ではパートナーが大部分（93.3%）で、夫婦で実家に同居している者ではパートナー53.3%（８人）、義母26.7%（４人）の順で、また母子のみ実家に同居している者では実父37.5%（３人）、実母37.5%（３人）であった。パートナーの就業形態は「常勤」66.7%（20人）が最も多く、「アルバイト」13.3%（４人）、「無職」16.7%（５人）であった。年収は「100万円以上～200万円未満」が最も多く、また家庭経済状況を「やや苦しい」と認識している者が46.7%（14人）あった。新生児の栄養法は母乳栄養 26.7%（８人）、混合栄養36.7%（11人）で６割は何らかの形で母乳を与えていた。

主な育児用品の調達方法を「自分達で購入」、「親や兄弟が購入」、「譲り受けた」、「レンタル利用」、「その他」の中から求めた結果、ベビーベッドは「譲り受けた」が、ベビー布団は「親や兄弟が購入」が最も多かった。衣類や風呂用品は「自分達で購入」が約４割あり、「親・兄弟の購入」や「譲り受けた」がそれぞれ３割であった（図１）。１か月間に要した育児費用の総額は、平均 13,075円でありその内訳として紙おむつ代5,882円、ミルク代 2,675円、その他 4,518円であり（表

表１　対象者の属性　n=30

平均年齢	対象者18.8歳（SD ±0.94） パートナー22.3歳(SD ±4.43)
家族形態	核家族14人（46.7%） 夫婦で実家に同居12人（40.0%） 母子のみ実家に同居４人（13.3%）
家計*	
核家族(n=15)	パートナー14人(93.3%)、本人１人(6.7%)
夫婦で実家に同居(n=15)	パートナー８人(53.3%)、義母４人(26.7%) 実母２人(13.3%)、実父１人(6.7%)
母子のみ実家に同居(n=８)	実父３人(37.5%)、実母３人(37.7%)、その他２人(25.5%)
パートナーの職業	常勤20人（66.7%） アルバイト４人（13.3%） 無職５人（16.7%）
年収	100万円未満６人（20.0%） 100万円以上～200万円未満　12人（40.0%） 200万円以上～300万円未満　７人（22.3%）
家庭経済状況	普通９人（30.0%） やや苦しい14人（46.7%） 苦しい６人（20.0%）
児の栄養法	母乳８人（26.7%） 混合11人(36.7%) ミルク11人（36.7%）

＊ 多重回答

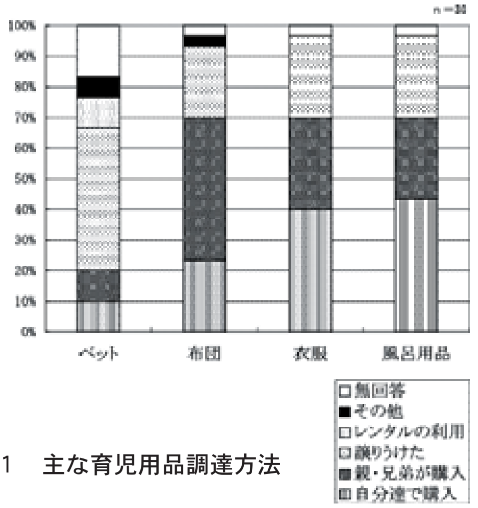

図１　主な育児用品調達方法

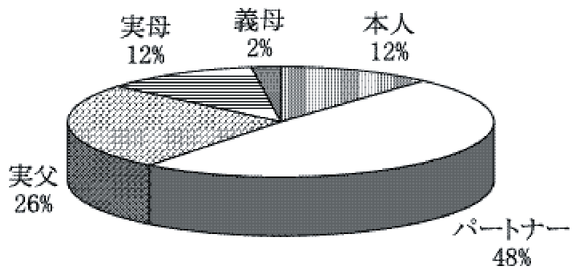

図2　育児費用負担者　n＝43（複数回答）

表２　１か月間の育児費用　　単位：円　n＝30

項　　目	平　均	(SD)
紙おむつ代	5,882	(4,553)
ミルク代	2,675	(3,005)
その他	4,518	(7,591)
総　　額	13,075	(11,678)

表３　若年母親の修正版 NPI　６カテゴリーの「普通の赤ちゃん」と「あなたの赤ちゃん」の平均値の比較

Wilcoxon の符号付順位検定

項　目		平均値（SD）	p
泣く	普通の赤ちゃん	3.57（0.817）	*
	あなたの赤ちゃん	3.07（0.868）	
哺乳	普通の赤ちゃん	3.07（1.081）	**
	あなたの赤ちゃん	2.33（1.061）	
吐く	普通の赤ちゃん	2.43（0.728）	n.s.
	あなたの赤ちゃん	2.37（0.765）	
睡眠	普通の赤ちゃん	2.77（0.971）	n.s.
	あなたの赤ちゃん	2.57（1.006）	
排便	普通の赤ちゃん	2.67（0.959）	**
	あなたの赤ちゃん	2.03（0.964）	
授乳や睡眠の習慣	普通の赤ちゃん	3.27（0.980）	**
	あなたの赤ちゃん	2.50（1.042）	

n.s.: not significant　*: $p<0.05$, **: $p<0.01$, ***: $p<0.001$
n：30人

２）、費用はパートナー48%が最も多く負担し、実父がそれに次いでいた（図２）。育児費の約４割（実父26%、実母12%）を実父母が負担していたのに対し、義父母の負担（義母２%、義父０%）は少なかった。

育児行動の実施状況として、「授乳」、「衣服の世話」、「沐浴」３つに関し準備から片づけまで誰がどの程度実施しているかの質問に対し、対象者自身は「授乳」に関することの87.6%、「衣服の世話」に関することの82.1%、「沐浴」に関することの76.9%を行っていた（図3）。

母親の子どもに対する知覚である６行動カテゴリーの「泣く」「授乳困難」「吐く」「睡眠困難」「排便困難」「授乳や睡眠の習慣化困難」に関し、「普通の赤ちゃん」と「あなたの赤ちゃん」の平均得点を比較すると、いずれの項目とも「あなたの赤ちゃん」の方が低く、特に「泣く」「授乳困難」「排便困難」「授乳や睡眠の習慣化困難」の４項目は Wilcoxon の符号付き順位検定で有意に得点が低かった（表３）。これらのことから、対象者である若年母親は、自分の赤ちゃんは普通の赤ちゃんに比べ扱いやすいと知覚していた。

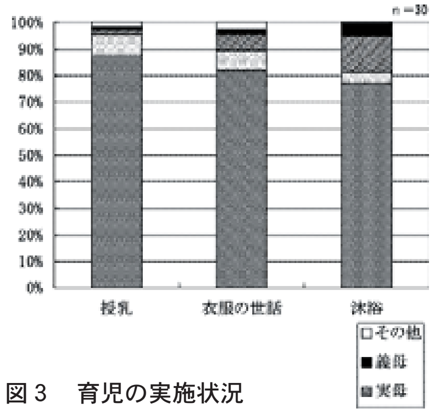

図３　育児の実施状況

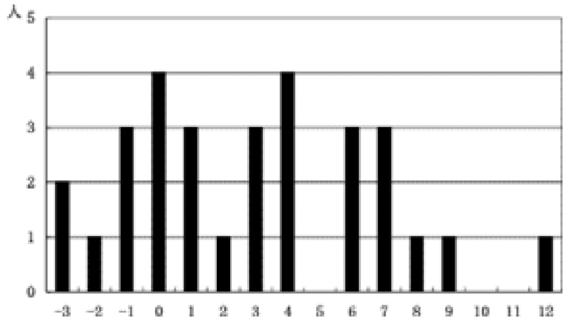

図４　若年母親の修正版 NPI 得点の分布

「普通の赤ちゃんの知覚得点」から「自分の赤ちゃんの知覚得点」を差し引いた修正版 NPI 得点は、－３から＋12までの範囲に分布していた（図４）。修正版 NPI 得点が０点以下の者は自分の赤ちゃんを普通の赤ちゃんより劣っているつまり negative に知覚しておりハイリスクな母親（negative 群）とみなされるが、ハイリスクな母親は33.3%（10人）であった。一方修正版 NPI 得点が１点以上で自分の赤ちゃんの方が普通の赤ちゃんより優れているとする positive 群は66.7%（20人）であった。「授乳」、「衣服の世話」、「沐浴」の育児行動実施率を negative 群と positive 群間で t 検定した結果、「授乳」や「沐浴」の実施率では positive 群と negative 群の間に有意差は認められなかったが、「衣服の世話」では positive 群の方が有意に高い実施率（$t=-2.148$, $p=0.041$）であった（表４）。

表４　育児実践に関する修正版 NPI 得点　positive 群と negative 群との比較

		平均値	SD	t 値	p
授乳	positive 群	88.2	19.09	-.252	n.s.
	negative 群	86.5	11.07		
衣服の世話	positive 群	85.8	11.58	-2.015	*
	negative 群	75.0	15.09		
沐浴	positive 群	78.7	30.86	-.428	n.s.
	negative 群	73.5	31.27		

*: $p<0.05$　　n.s.: not significant

Ⅳ．考察

今回対象となった若年者の年収は、「100万円以上～200万円未満」が多かったが、これは国民生活基本調査[16]の低年齢層に相当する29歳以下の夫婦のみの家庭の半分以下であり、家庭経済状況を苦しいと認識している者が圧倒的に多かった。このような経済状況下のため、育児用品の比較的高価なものは譲り受けたり、あるいは親などに購入してもらったりしているが一方、比較的安価なものは自分達で購入しており、自身の家庭経済状態に合わせ育児用品を整えたことが知れた。育児費用として１か月に１万円余を要しており、それらはパートナーが負担しているが実父母も援助しており、若年者が育児を遂行するには両親の経済的サポートも大きいといえる。

「授乳」や「衣服の世話」及び「沐浴」は若年母親が行っているのがかなり高率であり、若年の母親は育児への関心が低いとする先行研究[1]とは一致しなかった。これは、女性は結婚し、子どもを持つことで一人前として扱われ、子どもの世話は母親が行うのが当然であるとの風潮があることから対象者自身が育児を自分の役割と認識していること、またパートナーや家族も育児を若年母親に任せる意識があるためと推測される。一方、パートナーは育児費用ならびに家計を負担して父親としての責任を果そうとしていることが知れた。経済的負担でパートナーが果たしきれない部分を実父母が援助しており、若年夫婦ではあるが子どもの養育の責任を果そうとしているといよう。これらから、パートナーが父親としての責任を果たし不足分を両親等が果たせば若年母親であっても育児に支障がないことが示された。

若年妊娠は一般的に「恥かしいこと」であり「世間体が悪い」とされ、職場や地域で親や家族の評判を傷つける[17]といわれているが、筆者は調査依頼の面談で対象者や実母またはパートナーからそのような印象は受けなかった。これは社会的背景が沖縄と本土では異なるためと推測される。日本人は自己の集団の支持が得られるのは他の集団から是認が得られる場合であり、外部から避難されれば支持が得られない[18]と言われている。沖縄は明治政府による琉球処分まで独立国家であり、中国や日本の影響を受けつつも独自の性や結婚の文化を持っていた。例えば、結婚相手は家父長が決めるのではなくモーアシビー（原っぱで行われた男女交際）[19]によってお互いに知り合い、村落内の若者達によって統制が行われていた[20]こと等である。これらのことから若年者の妊娠・出産に対し親の世間体をさほど気にしない風潮を生んだと推察される。さらに、沖縄には門中を中心とする親族共同体[20]やユイマールのような村落共同体があり、それらが家族や若年母親を排斥しない社会を作り出している。排斥されない社会は、親子・家族に安心して育児にあたれる環境となり育児行動実施率が高くなったと推察される。

若年母親の修正版 NPI 得点の negative 率は33.3％であった。これを Tamashiro ら[21]の「泣く」「吐く」「睡眠」「排便」「授乳や睡眠の習慣」の５項目から構成される修正版 Broussard NPI 得点における成人母親の negative 率28％と比較すると、両者間に有意差（χ^2値=0.318, $p=0.573$）は認められなかった。このことから若年母親は子どもを negative に知覚するとは必ずしもいえず、子どもに対する知覚は年齢による差が認められないことが示された。

修正版 NPI 得点の negative 群と positive 群の間で、育児行動の実施率の差違を検討した結果、「衣服の世話」以外の「授乳」「沐浴」では有意差は認められなかった。これは対象者の分娩した施設では母乳栄養等授乳に関する指導が積極的に行われているため差がでなかったと推測される。また、新生児期は頸定してないため慣れない者が新生児を風呂に入れるのは難しい。しかし、母親は退院前に沐浴指導を受けていることから、negative 群と positive 群の間に沐浴実施率に有意差がでなかった推測される。衣服に関しては、positive 群の方の実施率が有意に高かったが、これは排泄によるおむつの汚れ等の赤ちゃんのサインに positive 群の方が適切に反応するためと解釈される。

本研究の対象者は調査者が距離的にアクセスしやすい沖縄県中南部地域の病院・診療所を受診している若年母親で、調査に同意の得られた者である。したがって、研究結果の一般化に限界がある。調査に協力の得られなかった者にむしろ問題があると推測される。

Ⅴ．結論

若年母親はパートナーや実家の援助を得ながら育児を行い、その実施率は高かったことから、若年の母親は育児への関心が低いとは必ずしもいえないことが明らかになった。また、赤ちゃんをnegativeに認識する割合も成人の母親と同程度であった。これらの結果から、周囲の支援により物理的にも心理的にも若年の母親は一般的な母親と同程度の育児行動がとれることが示唆された。

文　献

1） Field, T.M., Widmayer, S.M., Stringer, S., & Ignatoff, E.: Teenage, lower-class, black mothers and their preterm infants: An intervention and developmental follow-up, child-Development, 51, pp426-436, 1980.

2） Braussard, E.R. and Hartner, M.S.: Maternal perception of the neonate as related to development. Child Psychiatry and Human Development, 1（1）, 16-25, 1970.

3） 折坂誠，小辻文和：Ⅶ　避妊法の選択　1.思春期女性の避妊，産科と婦人科,第67巻　増刊号、2000.

4） 財団法人母子衛生研究会：母子保健の主なる統計 2006.

5） 沖縄県福祉保健部：平成16年　衛生統計年報（人口動態編）

6） 町浦美智子：若年出産・高年出産，Perinatal Care, 夏季増刊，pp214-217, 2003.

7） 目崎登，小谷衣里，佐々木純一：若年妊娠の現状と問題，産婦人科の世界，48（9），pp797-806, 1996.

8）J.A.L.シング（著），中野善達・清水知子（訳）：狼に育てられた子，カマラとアマラの養育日記，福村出版，1990.

9） Bowlby, J: Attachment and Loss, Vol.1 1982. 黒田実郎，大羽蓁，岡田洋子，黒田聖一（訳）:母子関係の理論Ⅰ　愛着行動，岩崎学術出版社，1997.

10）服部祥子他：精神発達と親子関係に関する研究（第２報），安田生命社会事業団研究助成論文集（健全育成分野），23（2），1987.

11）小林登：育つ育てるふれあいの子育て，風濤社，2000.

12）Rubin, R: Maternal Identity and the Maternal Experience, 1984. 新道幸恵、後藤桂子（訳）:ルヴァ・ルービンの母性論　母性の主観的体験，pp62-82，医学書院，1997.

13）外間登美子，竹中静広，平山清武：若年母親から出席した乳児の健康診査成績，思春期学,４（2），pp20-24, 1986.

14）外間登美子，竹中静広，平山清武：若年母親の育児に関する調査成績，思春期学,５（1），pp10-14, 1987.

15）上田礼子，小沢道子，平山宗宏，池田紀子，中川礼子：妊娠・出産・産褥期の適応行動（3）妊娠中と産褥期との関係，日本母性衛生学会誌，23（1），pp13-16, 1982.

16）厚生労働省大臣官房統計情報部編：平成15年　国民生活基礎調査

17）町浦美智子：社会的な視点からみた十代妊娠　-十代妊婦の面接調査から-，母性衛生，41（1），pp42-32, 2000.

18）Benedict, R. : The Chrysanthemum and the Sward, 1967, 長谷川松治（訳）：菊と刀（初版第82刷），現代教養文庫，pp292-344, 1989.

19）「沖縄を知る事典」編集委員会：沖縄を知る事典，紀伊国屋，2000.

20）上地安恒：離婚，沖縄心理学会（編）：沖縄の人と心，福岡，九州大学出版会，pp152-159 ,1994.

21）Tamashiro,K., Ueda,R., Kato,N.: Assessing fathers' perception of their newborns compared with mothers' perception to identify children at risk, Japan Journal of Health and Ecology, 71（1），pp3-7, 2005.

Journal of Okinawa Prefectural College of Nursing No.8 March 2007.

Relation Between Mothers' Perception to Their Infants and Child-rearing Attiutudes in Young Mothers

Kiyoko TAMASHIRO R.N., P.H.N., R.N.M., M.P.H.,[1)] Reiko UEDA D.M.Sci.[1)]

Abstract

【Background】

Teenage pregnancy rate has increased recently in Japan, especially in Okinawa Prefecture. Teen-age mothers show less desirable to child-rearing attitude than older mothers in the US. Braussard and Hartner found that when infants were rated by mothers as "not better than average" at the end of neonatal period, they were classified as a high risk. There has been little study about teen age mothers' child-rearing attitudes in Japan. Little is known about teen-age mothers' perception to their infants.

【Purpose】

The purpose of this study was to identify the relation between young mothers perception to their infants and their child- rearing attitude.

【Method】

This research is a part of longitudinal study focus on the relationship between younger mothers and their children. Thirty young mothers completed the 6 item Modified Neonatal Perception Inventory during the hospital stay following parturition at the seven obstetrics facilities in Okinawa, and again at 1 month post partum.. Also demographic factors and child rearing attitude of young mothers was surveyed at 1 month of postpartum.

【Result】

The majority of teenage couples or mothers live with their parents. Expensive child-rearing goods (i.e. baby bed) was bought by their parents, and relatively cheaper goods were prepared by themselves. Child rearing activities like nursing, bathing, dressing were surveyed, and the majority part of those activities were done by adolescent mothers. Mothers' perception to their infants as not better than average (negative perception), which was considered to be at risk, was 33% of mothers. There was no significant difference between negative perception and positive perception on nursing and bathing except dressing for their infants.

【Conclusion】

With the support of husbands and their own mothers, the majority part of child-rearing activities were practiced by teenage mothers.

Key Wards : Young mother, High risk, Neonate, Preparation of child- rearing goods, Child-rearing attitudes, Mothers' perception to their infants

1) Okinawa Prefectural College of Nursing